No. 651
をしまのすさび
冊一 函19

廿五

小詩荒

我了庵乃すさび

全

伊地知文庫
文庫20
415

越しほのなさし

小倉山乃ふもと中院の草庵にかりすみ
とせのとし待しほどは世にまじはりて煩ひていとゞ露
乃命もをしぬ身にこゝちして物にほこり
しかはよろ川は御しるしも嵐にちりなんとせしを
あとうしなひてさるべき海山流されかるとせし
ことの外をとこしをきゝふ　こしめるよとい　ちけ
やうやうそのありし関のむかしよりはさよりの
風ふかざりしのちはなかり心すなはち世のことわざにもまぎれて

伊地知氏書冊
内藤恥叟藏書

去りしやうにぬしとうしあるうら宜しい
かのうちとそもれうまつ立ある世のかりさま
よ行くきこゝ事ゝ松のあしへさきさま
いつこ読みしぬ宮とあれむ（きゝ猶七
月さあまるを　四の月まさ秋ゝ紅葉れ
菊咲立出く東海をく思ひ内すう
ゝあゝ内ゝ笑ゆ水まて
出しゝ山ゝ倒る紅とあれと雑色のあれ
いをゝ神仏ゝ拝さんとを思ひ

なくゝ内ゝ今秋ゝ川坂ゝ山清水
ハゝむくゝ紅ゝ山ゝのあまゝちゝこゝ
苔のむしゝ松の家ゝちゝむて今乱ゝ
しハ代坊ゝとゝいめゝきゝハ花の咲ゝて
あしぬまゝの日を花ゝりゝいゝ
泳ゝ波明ゝ紅ゝ山ゝむゝ家ゝ
浦波ゝい国ゝ家ゝ小舟のゝりゝ
すゝやゝ家ゝ外ゝゝゝいゝむゝ
ゝゝゝゝ山ゝ紅ぬ名を

くしられたりてこれ有るかりの貫之の詠
あもいきくいひろうて　世とうるとゆる
中うまれ思ひからまて
ゑ山の紫いはさくら紅葉時あて雲霧紅
心ちはしして思ひたるまてもなりて
行ほとふ地獄の苦りの系なといふ有りこれハ
京地にて耳かまてしてはてふふうとみ
ゑ侍し
雲りを紅思ひくらをへ人るる雲の苦の系嘉紅

まさかくこそいふ山紅すく立よりてみまてほ
しうらうと行きて紅をくいそ紅ハ者て
行行ふうふてすきぬ
ちくとの赤紅くらうこふけてのる清紅者
人きれぬ心のちのあるまもとて紅なて
いとおもしろやか老蘇乃家と山有ハ者
枝乃樹ちうまてあるなかなかよう紅
山をとはてなるえ乃すゑいと見有ーた
と紅くいうれぬきハうう紅すて今者一

よれ草は枕もいつくふと墨とぬすみけるあ
ぬ[illegible]ていて世あさりのさいくみまし
うハ　は義の宮きさ　いとおさけ[illegible]
ハ[illegible]ハ義ハ[illegible]ふと[illegible]ハ
このあきのいふやうこそ[illegible]
ゆ[illegible]ゆるあぬうあぬうの名を[illegible]
こそ[illegible]ぬ[illegible]ゆ[illegible]ふを[illegible]
ふるうぬうもかぬ[illegible]いとあ[illegible]
今ハ世をもあをよ[illegible]ぬ[illegible]あまりも板の下

みうこうら枕むつりれい一[illegible]
ロたるもにてるしたのりさ紀すうとうあて
に枕のこをかうりうまさやを川とうれうる
そて
ハをそ神ぬうぬ[illegible]やを川のやすを紀無[illegible]
いぬうとこれ山いさや分という而ハうめ内
とまるれいハ川とうもおうひうとれちまを[illegible]
而ハをつぬうぬうりゆうひの京ふす紀
くしうむそうをけしひるれおとろ

八幡宮はまたもとの社にかへらるめきはべり。彼伊勢のくにけこうやハ云井のうらにかくれぬるなりけりやうにて
そのうちに小地とやいふ所に三宝院
御所よりあはれいとくいとなみて
出仕するやうにハ森ようけあり堂のうち
をうつくしくすへてこいめをうつしの
らるるよひるの長話のとをろくことのかかと
ろ紀ろう氣なるやうにやうやうにて蓮

のちかし。彼ハ力ある紀かるるとかはるかはるとかはるかはる
れたりれみこれすとうるるるる孫ハちもりもも
お。流紀ろうそそ。うして行ろいれろ
法蓮寺ろう思根ろと。湯ある水のかるれるき
ようすて吸ろふ無ふ。ふ。ぬ。ぬ。ろ。を
ろハちめろ井ろるるしやうてさきをすあり
てちいさ紀堂法ろるふ。ろも。宗根ろと
かろ水ろ。ひかし。ひさことふ畑めいてて
ろあるひかるすす。伊ろめて紀水ろり

今をりやくらし蓑を脱井は水流れて走れり

不破の関屋いたむらしあれまくほりれいかさのや

なる板ひさしの　あらはらは荒り

秋風を吉野のまくらにぬるとくらり

昔半ばあまの不破の関もれ今はあらぬ名ばかり

関は荒れ河いらは荒れ名のみきてと

もむ作り名をとりそれとはちはるれ

とはすて家無まてのあるれもはされ

絵をなをあいとしてのかりて

はるは彩色つまあるやうあまり絵やうあまり

京流のをとやはうはなとあのあらちく

きしはうはは紅もあはあるとはうは

ちとはおちあ作しあるあるはあ一枝はの

まもとむしは紅ぬるはあるのちく

うらしは紅もあきはりしはまてく

中らし

うかりををまをふるはあはあ

して二うは道祖　五　花祖よりとから

してをぬるよりいつはきぬてもるゝぬ所の
りゝぶたも皆もろ〳〵ゝ心ゝ寄ぬゝかゝと
てちゝふ時ゝ寄ふまゝ〳〵のくれ方
あいゝ酒所ゝりゝけゝと秋の心の義
あをゝをゝあゝいひゝぬ相はあゝれゝ
ゝゝ所ゝ庵はを虫の声もゝれ　松陰西
ゝし秋を地の物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の月ひゝゝゝゝとゝ接ゝゝ稲いとゝゝめ
ゝぬへゝ旅はゝゝもあまりゝゝゝゝゝゝ

しゝゝゝゝゝ二条中納言殿ゝ
ゝきぬ　世前はあゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をて一秋ふるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝけふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
冠ゝけのめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ　内裏の月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のこれまでしやうく御おれめしきて侍ける
此れ志賀なと養老山よりの御石のとほり
なりしもなしにほくあそれらま纔
領そふし今夜ハ瑞岩寺とやいふ寺に
出くそ渡る此堂いと前文し山臨めり
はろうあって眺ふあれ乍ら高台にても
親和をおもしろうりぬる紀山水の清泉なり
まつれ早も経日一日やすらひ出ふらしくて
二程ハ明ぬ旅ぬの心得うさいとやすらくあさや

侍しおうくゆまうされ旅ねやうり見四絶の蔵れ侍れ
時光胡孫れ清碕ふ取絨あけしや去く取り給し
ハ二三日ありて稜内すその小まて高野彼
彼所まて世れ之清岩れ志紀清海く奏し
ハ是より亀寿ぬ人ハ麻績あるへしおほう
文ふりけり侍りし領とと高り小
志くけり紀ありたぬ山の陰とて中経り心琵琶も体
神代琵りけるぬるてしも並りおりくもしてたなあし
くやうめそり八郎文なきにて久へ侍るとむりて書らふ

半ゐし藻金大納言なりける時書つけ詰(?)侍
とてまうできたりける時かへしおくりけるにや侍る
侍し八月十五日夜の中に題給りて

遠夜(?)

杉まけ給ひしかのともしよとや
月残(?)さえふるまきて見えけん

旅曙(?)

横雲の波とて見えても日のくに
やとてとほめの夜くあけぼの

此頃(?)かはらめてはるかまりとはしくかけ侍し
やらん 枚くおりりしとこふるとまぬ事ら南(?)

のいさほしてた中くみなりしらて(?)
御前の耳にこの文をりしとみ書きて
むかしもあくてよ人の中くいりと思(?)
歌おもて宮にふ也六月十五日
まてなしやかん時に待ちて文姫(?)
紅葉の枝にそへ
られて仲房卿はまてさ(?)
ほさしぬ涼しくれ(?)

清返し

衣ほしてふ歌の紀のしや紅葉の錦の川ハとくらなき
いとすりあまりハ目数ゆへ 殊ゆ 女の中ハいとかされぬ
玄井も 山三ツにちらして おもしろく 新ハ内宮に
宮霧にちりまきて 嵐の絵もあるハ御くに緑
うつしまり川にすきゝ海しゝ又ちぎう 松風さ
て新古今 百数とそのこゝろも 又雅な 世の女めし
なまとむしり 其の丸紋めと いひかくるも かくてハ
有さまあ 此ほとに 三目紀の女あしもえ 正月元日なとに
こゝにく絵を 中あれハ 松とそゝくハ 緑の 錦とあり

をねの山の渡すまる 指世にてねころなく 高砂の
尾上さうのはれの思ひに右し名高き紀米の
目録を近て 浪ある海のハ 指晴七三字
果れ外の故人乃思かくをそりあいめて
物あれれあり 秋つよ女紀つる風 明らさし
吉川まりて 今秋の月に 指星ちるし 何やとて
小短冊絵と給 数え此渡世家にハはあってめあれ
女え思ひ衣えかくの人とそのもし 絵まつ女めれと
とのく思ひの霧をよすま御く 指三九紫此を紙

あしたぬるまでし文風まつ吹たちて浦とかく
すみれ須の山陰までも残れる所ハ今でいと多く
哀しくすりもなき須代乃きめしと書て古くれ見
をしらは印まうけていとあはれなり
名ある須磨代の浦あしとや摩耶の林の月守むん
鎌倉大納言乃松須磨りやふくと乃こきこらしと
まちかおかしく中納言の日数をしらハ恋しと申して
こしく清須の山ちそ今ハ猶あかましきよし
おほかやをくまくらして一請乃ふみのまにてしやつされしも

あんうきやしふ佗し都よりあまりて侘れる旅上
人なとは去れう浦くうらむまそこてうしこみ
名ある有人須てあそき侍しうと須磨代ゆるに
八重葎の露そささやしの花まつふ浦の花も
ありうし浦なる我身ひとつの秋と在り原
ええくいなくさとうし在原ゆる参議の藤
あとりふ人須てうの名うまふぬれぬま八やよひも
やうくいえ侘うし人くやあひしうとさやしの
承人も出し須敷すう須磨れあふと哉るう

[illegible]人のすゝめあるとも[illegible]伏見の里
[illegible]の枕いとゝうら[illegible]秋の[illegible]月裏[illegible]
[illegible]ふるゝ四方ふ[illegible]山[illegible]
[illegible]これ[illegible]
[illegible]
[illegible]八月の末[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]
常[illegible]腰[illegible]潮[illegible]の人
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

きてし条心はるうら小今者ふうくし信
ひしめきてすふるや西つきまるしゆ
はたちり作しかふくく四裏へほとゝま
そういうるく祝ふさしおひはうしてかて
世とやはくさんと思うさういんさ和紀
内重ゆ暁るふ別乃と作るぬしくく
ゆ作しう八爰はちゆるこてらしてをれま
うてぬるるも用さし除者もいつるくと
ゝそちるるる長野の内記ゆ対おるし

はるる中くゝ今はは思ひはてるゆ作ぬくき作る
九月ふうり北軍番井に作るのるさはそ
るふうしかりし学ちりまれ言い武士おも
ひはすさまるくゝ宿るふ作るちつまる
旅の宣前るもるるちは所をあれはるて
ちうれいはるこちひろくと学て作し大初さに
称は遅直爰よ小具足ゝ家毛ろ馬ゆ乃新
えうら結城小田作行あといすのるもあくの
具足ゝも水はるゆ甲のくくるゝ内作

きらめきて夕日ふかくやく一日はまつりごとの
山地しとどのきらきらしくうるはしく後陣に
仁木左兵衛小心者といふ東国の武士数騎にて
ゆくゆくのおしの軍は馬はまくのの奉行九郎
頃も及ばれおと坂東方一とはしらし黒駒馬
ゆく奉ゆくはれる程なし年ゆくゆく
あけまれの海もすべてあるもみ原原ふ
四日あひぬ乗乗人ふすれゆり引る十足
いつもゆくゆくもとよりなるものゆゆり東国の

舊ハ殘ゆくのあるゆゆゆゆゆゆゆゆ佐竹
ゆゆふとゆゆゆゆ大ゆゆゆれ数多ゆゆ軍
やゆゆゆふ内裏へまゆゆ数ゆのかまゆ
見ゆゆ軍兵ゆゆめ寄て寄ゆ一人ゆよ
いゆ中門の前ふ立て改兵後ゆ新信見
ゆゆゆとゆは西園寺左衛門ゆおあひて門
導ゆゆ矢とゆゆて堂上清前のめゆゆ
用ゆふくゆゆゆいゆ宿ゆハ盗弁の長ゆゆ
家ゆゆ山ゆゆゆめ内裏ふゆゆ信ゆゆゆ

おそれやうこと行ゆきて
うけあるてそ申りうと拙聞て大さ
堺迄（除）差出候ハ志ひん城ひて異様の
事ゆゑ申くゆく
いとまうこと申り京小仁義礼智雜つく
こそ浦の運送ハこもち作こあとこく
あのかうこけあるこうし論食大根建久
よこうめく上洛さこれ
こあ故こそこうハ言と書此浦元小法

形勢ゑまこひこの浦元小伊候ゆ
小こて作ゆさやこれ志紀も浦旅此浦ゆれハ
ゆけこゆも及こうしやらんなり紀畜
貢馬十疋内裏（年）浦うの小ゆ
てとこうこひこうしこれ
十五歩ふ乃ゆこうこうりかとて鹿ゆれ
此乃ゆこれあるこなここうこ
いるこうこそおりく墨と浦也作大方
ゆこひの浦松のなくさあハこうこひこ作ゆ

まそゝろし田舎人ハ連歌なとゝいふ事をもむ
ねとして點なと乞くより多く侍しかとみな
むつかしくて久しく今ハ朝の立ぞして何事
かあらん九月九日ハ重陽の御會とて一しをそ
短冊をかり給ふ文人ハ右大臣吟ぜ詠句の給
ふ者ニ詩作て懐紙講じ侍りしハ次て歌
の短冊を講じれけるを聞りまいらせ
侍りしほとに明かか日一定とおほえて
参し侍し

主人の詞のむねハ家人ふるまふ事なと菊の白露
やゝ御渡りし候ひし久しかりけるしあらざりし
あたりハ老の忘れてこれハふんなり
おほえておもしろくかけ侍しをふみて居し
せん傲す風鳴きたり吹いてさくれかまふ
神もなくをとこしく御心まてなりて出は
そのかけハ吹てふよしの菊将ハちりまも
いつれ次ひちしくまとなりおほてうさなり ひら
かしおもしろき心地していとしいふし安なる

所いたるをゝりぬてゝとくめ紀かさもとり侍を
あてゝしられいこいいうる事ふとゝまん
まゝひいたゝるゝ所すへてゆゝ山さゝ仏り
なりとゝて関東のゝ名ゝらめゝて公家
ふ法をひゝゝぬゝきまゝる風ゝも侍
杉ゝ高い馬まゝ杉ゝれいつよゝ侍ゝてゝゝ
せゝふゝきゝゝぬゝ武安寺とゝ侍ゝ取く除事
ありゝ寶院僧ゝ中ゝとゝゝるゝゝ作りゝ紀
所ゝて侍所ゝ高ゝゝいゝあゝゝゝ紀事地

けゝ風ゝよゝきゝれゝふゝいゝゝゝみゝゝゝゝゝゝゝれゝと
ゝゝて関ゝまゝゝゝゝゝゝゝ面ゝゝゝ還者
ゝゝゝ高ゝゝあゝき事ゝゝゝゝ長ゝゝゝ
武家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紀ゝ
ゝゝて作ゝゝ作事あゝて人ゝいゝゝ紀
ゝ所ゝ関ゝゝゝれゝ作ゝゝ新ゝゝゝ
ゝゝ見ゝゝゝふゝゝゝゝれゝゝゝゝの所事の
像ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ品ゝくゝふゝゝゝめゝて次の
あゝゝゝゝの作ゝ作ゝて還侍ゝ 強金

宰相中将重衡卿は、はるばると出でうせ給ひしのちは、
さてもさてもいかがせんと、今夜宰相
中将の御内をうかがひ給へば、軍まいりつかうまつる
こしもとに、小用とて、馬鞍を
ぬき具せられたりしを、みうしなひてあやまりし
とぞ、人々もかたらひあへりしかば、
二度まいりたる軍いまだ遠国のものとありて
行方遠国にて十九日還来あり。ひとびとは
行方まぐれ、侍従中納言殿中納言
隆房卿、左衛門督殿、仲房卿、左兵衛督殿、
清盛朝臣、右兵衛督殿、
うちもらされたるもの、姿をもあらためず、
うしろ髪あり。清盛の物
ぐるみ人々、立てて、
指をかみ、小川宰相中将殿、
行方まぐれ給ひぬ。清盛朝臣、
うちもらされ給ひぬ。中納言
あまぜ大炎寺とぞ、

歌よみてあそはしける次の日北野天満宮
お御もいとゝ覚えしかと綸旨宰相中将
すてに先祖のよし申伝へしかは御あ今日
人々ゐ寄我かまゝく供奉の今夜は般若経と
いつきまゐりて人をおりしまぬ又の日もまたれて
人々ころ敷まく供奉武佐寺に御はし
まされより石山へ入せ給ふ本堂の前は
御前かやうけれは志かるへし海にて りふ入て
いとおかしろし観音北利生方便も此御幸

まいりて光る姫らんとめてをし給ひし同名
三郷よりまゐりあひて供奉の人々めつらしき
目をおとろかし雑教実時隆清以下家敷朝衣
きくまいりあひて御幸のたえたに供奉の武士
次に芸要御後にさふらひ義孫小真定
まて先陣にまいる尊氏公から御後
供奉に北軍兵二三万騎も立てならひけり
つゝきたる事おひたゝしかりける内裏へ
入せおはしませ宰相中将陣中に志て

行幸ありて奉ら還幸なりしときハ例よりあるを
ゑらばれて特戒衣の人々四位五位
まいらせられ南殿小御所にて
人々ゑらばれ庭上に候ふ侍臣雅敦以下
候ふ百官もつとめふるまひ典侍侍内侍
如人々ゑらばれかもなをめつらしいとも
特よりなり以ほとりつゝ旅ねの夏
のこりなくて今ハいとゝふるさとしの京
を人々も如ものきはなき事ハ
ゆゑ

野遊をれハ行末もいとゝ加へ人ゝ
ゑらばれて九月の還幸いとゝはるゝ
元亨天皇霊亀元年甫玉貞法の王子行幸
ゑらばれ今ハ養老の例なり行幸の
めでたき例なり年号改めて霊亀元年
養老とあらたまる還幸ゑらばれ九月の行幸
ゑらばれの宿禰久
ゑらばれ例ふるめでたき
ゑらばれ例ふるめでたき
ゑらばれ例ふるめでたき

ほのかなりにすしおもひてそのまゝの御
旅ねの床をくにわすれしたゝく風のうへ
なとひきやりて書流せることいとゞ
らうしきものくさくさハ見まほしく紙すくなく
あれハうち散一筆ありかの文の端もとめつる
思ひ草のうゑとんなまし

御作さらん

けはしくしるしをとゞめて書なりしかもまう
なるあまりにいふかひなきこともおほかりし
なかとひきちる紙すくしめいえぬ也御判とぞ御免あり

良基公

御判

依持是院法印 権大僧都妙椿 所望不肖春蚓
秋蛇之嘲紙書 切矣

右本者後普光園摂政殿述作也以彼
真筆本 於将軍家御本 臨写之 校合之也 可謂證

本書欄

文明二暦蜻月上浣

九條兼椿中將藤原朝臣

良基　摂政関白従一位太政大臣氏長者号後普光園院

二條殿道平公之男母右大臣公顕公女元應二生庚申

光明院御在位貞和二丙戌潤改閏白于時廿二歳

後光厳院濃州美濃井除幸文和二年癸酉月也于時

良基三十四歳　後小松院御即位永德三癸亥

白也于時六十四歳　同御宇嘉慶二戊子年六月十三日薨六十九歳

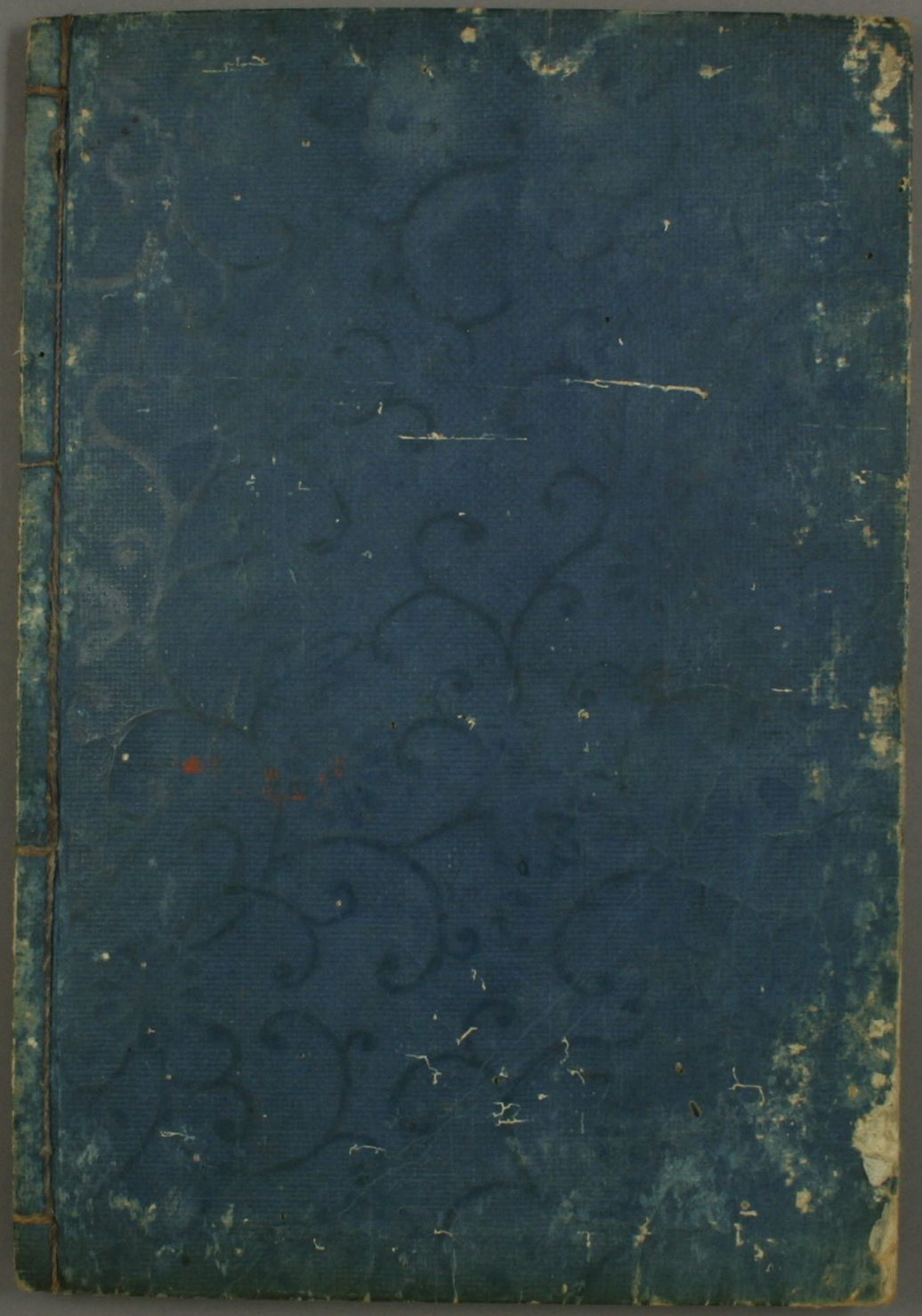
後光厳院美濃國除幸之事太平記江巻左之

山名右京大夫氏清方氏將軍と致吉野殿の味方成

文和二癸巳五月九日京都ヘ押寄合戦あり其

時分尊氏公上洛給ふて京都ハ元譽ゆへ
此合戦以来ふたゝび東坂本へ陣幸也義詮
勢ひ京を奪ひ雖防戦終ふ京方打負義
詮も宿所ゆへ又坂本へ落集ル処ふ山門
も南方へ四五千為ル大意院法師ル
方能ふ堅固ふ城家ふ法師ル所の宮
所も雖如同六月十三日坂本法師ゆ東山別
地法へ上ル事ハ数度戦ふ濃列ハ無
并へ除幸ゆり二条前関白左大臣以下ふ

武蔵ふハ義貞勢ひ長ル義詮
方ふ味ル 木河内楠地
方ふ記ふ上ル此所ふ濃の国の方護 方義
大将方ふ頼康也 小治皇居ル事ハ還幸
の事ハ方ふ記 小ふ上ル 是ハ東国静
謐小ふ尊氏公上洛ふ京都 又大勢ふ成
方ふ 此所ふ文和三年方ふ此
成小ふ氏公ハ陣ふ九ふ方ふ
義貞方ふ味ル方ふ此
也ふの所の陣ふ陣ふ

[illegible]の道を[illegible]
[illegible]は京より下向[illegible]
井出沖[illegible]還者[illegible]武将[illegible]
[illegible]あり[illegible]平泥の軍[illegible]
泥[illegible]文和[illegible]の還[illegible]文和[illegible]
中院[illegible]（除[illegible]初[illegible]
移[illegible]北[illegible]此[illegible]
平泥[illegible]
高（[illegible]移[illegible]
[illegible]あり[illegible]小[illegible]下向[illegible]還者
の[illegible]の[illegible]良基[illegible]還者[illegible]
付[illegible]

美術書肆
柏林社書店
東京都文京区春日町2
電話 (921) 5445